

一月一〇日（火）

「小野寺さん、平和堂のところまで来たよ」

武藤さんが顎で信号を示した。

「あそこのマクドナルドまで」

「分かっている、分かっている。もうちょっとだけ頑張れ。笠井さんは、もう良いですよ」

私の背中に手を添えてくれている笠井さんは、首を振って「最後まで付き合います」と眼鏡の向こうの優しい目を細めて答えてくれた。穏やかで優しい雰囲気、笠井さんがめちやくちやイケメンに思える。などとぼんやり考えていたら、肩を貸してくれている武藤さんが、「さあ、歩いて」とグイグイ安威川の方へ歩かせてくれる。

二人のおじさんに支えられていると、だんだん足に力が蘇ってきた。信号がまだ二つ三つあったのに、あつという間に北摂つばさ高校前のマクドナルドに辿り着いた。

「本当にここで良いの？」

武藤さんはお店の中まで連れて行ってくれて、ゆつくりと私を座らせてくれた。笠井さんはコーヒーと水を持ってきてくれた。

「ああ、すみません。お代」

財布を探してカバンに手を伸ばしたのに、笠井さんは「いい、いらぬ」と言う。私の向かいに腰掛けた武藤さんは、笠井さんに両手を軽く合わせて、「付き合わせちゃって、すみません」と言った。

「いえ、どうせ帰り道ですし。沢良木の市営住宅あたりなんで」

「ああ、それで。じゃあ後は僕が見てるんで、また『にしじま』か『かどや』で」

「それじゃあ、よろしく」と頭を下げ、笠井さんはお店を出た。武藤さんは自分のコーヒーも注文してくると、再びどつかりと向かいに座った。しきりに水を飲めと勧めてくる。

「武藤さんも、すみません」

「いやいや、ウチの妹が無理やり飲ませちゃったでしょ。ペースも考えないで」

武藤さんの妹さん？

「夕方に帰った、高橋香織。アレ、実の妹」

「え、そうなんですか？」

そう言われると、目元というか、全体の雰囲気は似ていた気がする。武藤さんは通知のなったスマホを見て、申し訳なさそうな顔を私に向ける。

「ごめん、妻が『まだか』って送ってきちゃって」

「あ、私のことはお気になさらず」

「じゃあ、とにかくお水飲んでね」と言つて、武藤さんは自分のカップを持つた。奥さんによろしくお伝えください、と遠ざかっていく背中に伝えると、片手を上げた身振りが帰ってきた。

水が入った手元のカップを口元に運び、ぼんやりと外を眺める。デリバリーから戻ってきた店員さんは、ほんの数分で私服に着替えてバックヤードから出てきた。デリバリーの制服を着ている時は気がつかなかったけど、見覚えがあるような……。

「もしかして、ルミ？」

マクドナルドの店員さんはこちらをジッと見て私の名前を呟いた。その声にも聞き覚えがある。

「彩夏？」

彩夏は小さく頷いた。通行の妨げにならないよう、私の方へ体を寄せる。彼女に「今、実家？」と尋ねると、「そっちは？」と質問が返ってくる。否定も肯定もない沈黙の後、彩夏は「じゃあ」とお店を出ていった。

彼女と入れ替わりに店内へ吹き込んだ冷たい空気に、頭が少しずつ冴えてくる。とりあえずコーヒー飲んで、トイレ行こう。

初出 令和三年二月一四日 小説家になろうにて公開